

オオカワヂシヤ



市山にて

(撮影：桐原真希)

市山地区の朝鍋川の中州を歩いていたときのことです。「あ！カワヂシヤだ！久しぶり！」と目にとまった小さな花を喜んで撮影しました。カワヂシヤは県によっては希少種に指定されている植物です。ところが何となく雰囲気の違いです。「こんなに紫色だったかしら？」学生時代に出会った花はもっと白かった印象がありました。でも、姿形はそっくりなので、きっと地域変異で色が違うのかな、と思っていました。

しかし、後日よく調べてみると、市山で見たこの花は、オオカワヂシヤという別の植物であることが分かりました。しかも、日本在来のカワヂシヤを駆逐しつつあるということで、環境省が「特定外来種」に指定している植物だったのです。特定外来種とは、人命や農林水産業、生態系に特に悪影響を与える恐れのある帰化生物とされています。ヌートリアやセアカゴケグモなどが指定されていますが、いずれも駆除は難航しているようです。日本列島が、数万年単位で作り上げて来たこの国独自の生き

物が、外来種によってわずか十数年で消滅してしまうこともある外来種問題。まさか、こんな可愛らしい草花までがエイリアンの存在だとは、大きな衝撃を受けました。

「川に咲く大きなチシヤ」という名のオオカワヂシヤですが、「チシヤ」とは、レタスの和名です。ところが、レタスはキク科ですが、オオカワヂシヤはキク科ではありません。実は、オオカワヂシヤは以前紹介しましたオオイヌノフグリと同じ仲間で、ゴマノハグサ科クワガタソウ属に分類されています。その証拠に、オオイヌノフグリと花がそっくりです。

今や、里山でみかけるクワガタソウ属の大半が外国産です。帰化植物側から見れば、人間のおかげで生息地を広げることができ、繁栄に成功していると言えますが、多くの在来種は、帰化植物との競争に負け、出会う機会がますます減っています。まだ一度しか見たことのないカワヂシヤ、この南部町で会えるといいなと思います。

自然観察指導員 桐原真希